

様式第 2 号

視察研修先	宮城県南三陸町議会	氏名	太田 陽子
視察研修項目	震災からの復興及び防災について		
<p>感想・所見など</p> <p>南三陸町は、震災から 11 年経ち、居住地を高台に移転し、町庁舎や町立病院、公営住宅などの整備を終え、一段落下ということだった。</p> <p>海岸部を商業地に転用していくということだったが、まだ、空き地が多く、戻っていない状況だった。</p> <p>道の駅に、震災記念館や市場や食堂など建設されていた。隈研吾氏が設計し、地元の木材を使用し、建てられていた。記念館は休業日で見学できなかった。</p> <p>庁舎や図書館など、地元の木材を使い、同じコンセプトで建てられていた。図書館は見学できなかったが、移動のバスから見られたが、温かく希望が持てるような建物だった。</p> <p>海岸部の防潮堤は、100 年に一回の津波に対応している作りということだったが、商業地に働く人を守るためとの事だった。</p> <p>高台に避難したため、人命を守れるという、安心があるようだった。災害公営住宅など、役場や病院の目の前にあった。役場には、だれでも使えるスペースがあるなど、住民の孤立を防ぐ配慮を感じた。</p> <p>大きな災害による長期の避難など、経験の中から生まれたものと思った。</p> <p>居住地を高台に避難したことで、津波の心配がなく、生命を守れることが安心につながってるようだった。</p> <p>住民を守るため、町の職員が命を落とした場所への献花を予定していたが、時間がなく、できなかったことが残念だった。</p>			

様式第 2 号

視察研修先	宮城県気仙沼市議会	氏名	太田 陽子
視察研修項目	震災からの復興及び防災について		
<p>感想・所見など</p> <p>気仙沼市は、リアス式海岸のため、昔から津波の被害を受け、津波に対する意識もあり、市の危機管理課など意識の高さを感じた。</p> <p>気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館において、視察研修を受け入れていただいた。</p> <p>前館長で、震災時は危機管理課の課長だった方より、館内の案内をしていただき、震災時の危機管理の状況などお伺いでき、映像で見ていた震災が身近なもの、自分たちも考えなければならない防災に対する心構えを教えていただいた。</p> <p>伝承館は、向洋高校の跡地であり、高校生に犠牲者はなく、全員避難できたということだった。</p> <p>生徒を避難させ、残った教職員の動きなど、11年経ったが、情景がリアルで、被害の大きさを目の当たりにした。</p> <p>明治にあった津波により、大きな津波に備え、一時避難所の設定など、市民とともに避難訓練や、中学生への防災教育など取り組んでいたということだった。何か所もあった一時避難所はほとんど津波の被害にあったが、二次避難所への移動など判断したが、一か所だけ、犠牲者があり、危機管理課の責任を感じていると話されていた。</p> <p>高校生は、明治の津波の時に設定された、一次避難所に避難したが、そこのお寺の住職の判断で、全員、二次避難所に移動したということだったので、全員に無事だったということだった。4キロあり、走って逃げたということだった。普段の訓練と情報収集があったからと思った。</p> <p>子どもたちの防災教育も役立ち、中学校の避難所で、役割を担ってくれたと話されていた。今後、重要なキーワードと感じた。</p> <p>伝承館の中は、津波の大きさが分かった。1階は、筋交いのある部屋は、天井など落ちることはなく、窓枠なども残っていたが、無い部屋は、廊下を越えて後ろの校舎まで窓を壊していた。4階には、車が流されていた。残った教職員の動きなど、津波の大きさに屋上の階段の屋根の部分に昇ったなど、想像を絶する惨状だった。後ろの建物は2階までの被害しかなかった。建物を整備するときに役立つということだった。</p> <p>建物と建物に挟まった、民家の二階で二人の女性が助かったなど、震災の被害の大きさを実感した。</p> <p>震災後、避難所になった中学校での、卒業式の様子など涙を禁じえなかった。なるべく早く、学校を再開するようにしたと話されていた。</p> <p>すべての市民の命を守る防災など、課題が浮き彫りになった。</p> <p>元館長の方が、1か月以上、自分のことを顧みず、歯磨きなど日常のこともままならなかったため、歯周病になり大きな心臓病を患ったということなので、気を付けてと話されていた。防災用品に、液体の口腔洗浄剤は必須であると再認識した。</p> <p>今後もしろいろな経験をお聞きしたいと思った。</p>			